

鄂上清子金鑑

第十六卷

郭上清子金鑑

第十六卷

岩波書店

野上彌生子全集 第十六卷

第六回配本(全二十三卷)

一九八〇年十一月六日 発行

定価 三三〇〇円

著 者 野 上 彌 生 子

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 緑 川 亨 書店

電話 〇三六五二
振替 東京六三六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

目 次

歐洲に旅するに當りて 三

序 七

海外からの便り 九

序 信 一

上 海 三

香 港 三

シンガポール 七

ヂヨホール 七

ペナン 五

コロンボ 五

アデン 五

紅海、ポートサイド 七

エヂプト……………八九

カイロ……………九一

ギゼ、メンフィス、サツカラ……………一〇四

ルクソル……………一三三

カルナク、アスワン……………一三五

東地中海……………一五七

アレクサンドリアからナポリへ……………一五九

イタリア……………一七九

ナポリからローマへ……………一八一

ローマ……………一九六

ロビラント伯爵夫人(二九六) サン・ピエトロ(三〇八) 大学町(三三四) 花のローマ(三三四)

ローマの或る日(三四二) ヴィア・フラミニア(三四六) ローマの日記から(三五二)

アシジ……………一九三

フィレンツェ……………三三二

その一(三三三) その二(三三五)

ミラノ	三三七
ヴェネツィア	三四五
シチリア	三五二
パレルモ(三五)	シラクサ(三六)
	エトナ登山(三七)
イギリス	三八一
ロンドンの宿	三八三
ハムプトン・コート	四二二
リーズからダラムへ	四三二
オックスフォードとケイムブリッジ	四四四
オックスフォード(四四)	ケイムブリッジ(四五)
後 記	四七七

紀

行

二

歐洲に旅するに當りて

学ぶことは人間に課せられた運命的な課題である。人が進歩する為には生れるから死に至るまで、学ぶことを怠つてはならない。同時にこれは人間の社会にも、国家にも、相通ずる原理である。この地上には多くの民族、多くの国家がそれ自身の歴史、伝統、文化をもち、丁度この頃の秋の清らかな夜空を飾る星のやうに、われわれの地球を飾つてゐる。それぞれの星座にそれぞれの光輝があるやうに、各々の民族、各々の国家に他の追従を許さない特長と優秀がある。さうして、国家的に民族的にわれわれが絶えず進歩と発達をつゞけようとするならば、謙虚につゞましく、他の国家民族から常に学ばなければならぬ。われわれの日本が三千年來つねに国家として、民族として、実践して來た最大の努力はその一事であつた。われわれは遠い昔から、近隣の国々から学び得る限りを學んだ。最近の一世紀はまた泰西の諸国のすぐれた文化に対する最も忠実な弟子であつたと云ひ得る。しかし地理的な、風土的な相違は、植物を移植する時、違つた土や氣候がもととは可なり違つた植物にするやうに日本独特の変化を遂げてゐる。殊にまた古來から存在する宗教、政治、社会組織は、同じ理由によつて、西欧諸国にあるものとは非常に違つた風俗、習慣、芸術、文化を創造してゐる。而かも封建時代の鎖国政策は、われわれの国の眞の姿を世界にひろく示すことを不可能にした。この長い間の交通

の杜絶から引き起された歪曲と無理解は、われわれの頭上に世界を三四日でめぐる飛行機がとび、友人のロンドンの書齋と、私たちの茶の間で自由に笑ひ話がし合へるやうな今日になつてさへ、まだ十分匡正することが出来ないのである。これはわれわれ日本人に取つて何よりの不満であると共に、西欧諸国の人々にも非常に不幸なことだと思ふ。何故なればもつと正しく知りさへすれば利益にもなれば、興味をも感ずるに相違ないことをその不便な壁によつて利益もえられなければ、楽しみをも遮断されてゐるからである。しかしこれは反省すればわれわれにも手落ちがあつた。われわれは常に謙虚に摂取することに熱心ではあつたが、一つは告げ知らせることを卑しむ東洋風な道德心から敢へて進んで自分から教へようとはしなかつたからである。しかし今はわれわれは世界の文化の融和と向上のために、昔の消極的な態度を捨てなければならぬ。あなた方の国の持つてゐる美しきもの、善きもの、優れたるものに対しては、今後ますます積極的に取り入れることに努めるとともに、われわれの持つてゐる美しきもの、善きもの、優れたるものをも、隔意なく認識することを要求したのである。理解は愛の母胎である。お互ひの優秀と美を尊敬し合ふものの間に、醜い不和や争ひはない。同時にまた花園の花がさまざまに異なる色彩や、匂ひや、姿を保ちながら、それ故にこそ花園を一層美しくするやうに、すべての民族や国家が、それぞれの芸術や文化をその特殊な形のまゝ認めあひ、なほ進んでその特殊なうちに、普遍的な共通の美しいものが隠されてゐることを賢く認識することによつて、世界の文化はますます豊富に美しくなりまことを信ずるからである。

私たちの今度の旅行が、もし少しでもさうした事に役立つならば、望外の仕合せだと思つてゐる。

欧
米
の
旅
上

序

この旅行記は、昭和十三年の秋から翌年の冬に及ぶ外国旅行の前半、出発からイタリア滞在までのことを書いたものと云つてよい。思へば私たちの旅行は、平和な世界を見た最後の機会であつた。それでも後にはヨーロッパの戦雲に捲きこまれ、避難者としてあわただしく帰朝したが、今や戦ひの火は東亜の空に拡大し、皇軍の輝やかしい武威が、当時は外国の支配下にあつたそれぞれの寄港地を、私たちの日の丸で蔽うてゐるのを考へると感慨無量である。

本文にも書いてある通り、私はヨーロッパの客間たる大都市にも増して、途中の廊下とも云ふべき寄港地に多くの興味をよせた。いかなる民族の、それを支配してゐるいかなる政治力、経済力の、またいかなる宗教、風俗、習慣のあひだを抜けて行くかに好奇心があつた。それ故上海、香港、昭南島（シンガポール）、ペナン、と、もの馴れた旅行者は大して心もとめない場所に多くのペンを費したことは、今日となつてはよいことをしたと思ふ。私たちの勢力のもとに置かれることになつた土地の面影を、わづかでも読者に伝へられるわけだから。ただあまりに道草を食ひすぎて、この上巻にはイタリアまでしか書けなかつた（本全集では頁数の都合で、初版本の下巻、「オックスフ」）。しかし下巻には、他のヨーロッパ諸国からアメリカについても書きたいと思ふ。知ることはいかなる場合にも必要である。味方にするも、敵に廻すも、その本来の姿を常に正しく捉へなければならぬ。また捉へ方にしても、単に政治

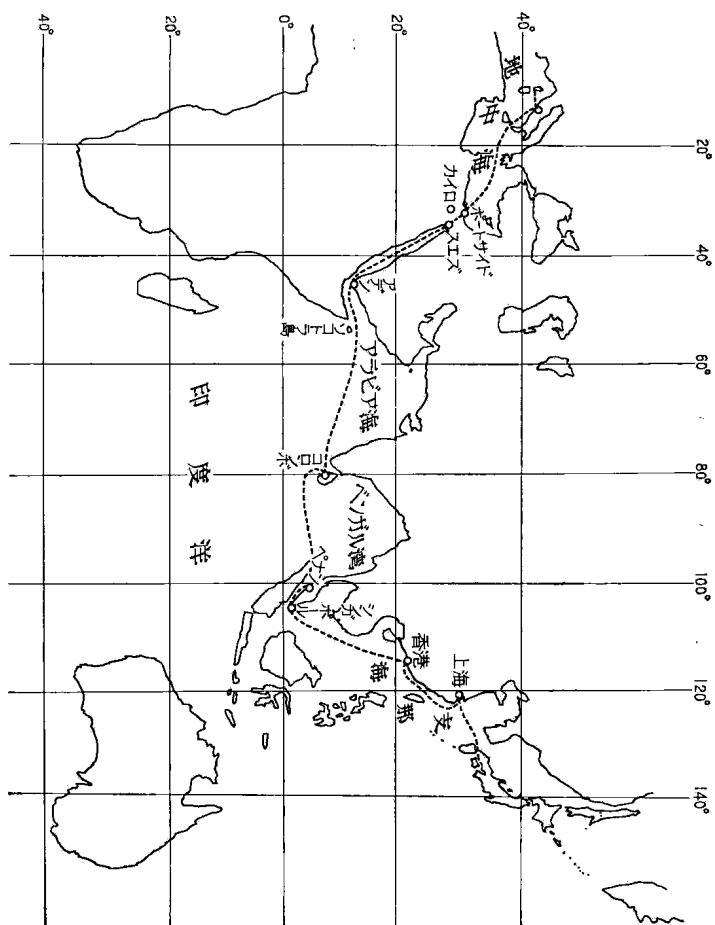
や、経済や、軍事のみでは不完全である。勿論またそれらの角度からする批判や把握は、私の力の及ぶところではないが、少くとも文化を愛し、文化の促進に携はるものとしての私の眼に映つたさまざまな国の影像是、今後それがどんな変貌をなさうとも、「かくあつた」ことを知らせる点で役立つに相違ない。「かくあらせたい」私たちの希望も、「かくあつた」ことの上にもつとも根強く打ち建てられる筈である。当分のあひだ、一般的には外国に旅することなど出来さうもない事情におかれてゐる際であればあるほど、私が世に送らうとするこの書物は、ひろい意味においては私の職域奉公でもあると信じてゐる。

ついでながら、出版に際して、岩波茂雄氏を初め、布川角左衛門氏、山田憲吉氏その他岩波書店の方々の御親切に深く御礼を申し上げます。

昭和十七年四月

野上彌生子

海外からの便り



序 信

長いあひだ御無沙汰に打ち過ぎてをりますうちに、東京駅でお別れ申上げて以来すでに三月にならうと致してをります。私の馴れない旅のころも、このローマのしづかな宿で少しは落ちついて参つたやうに存じられます。あるじは講義の打ち合せその他でロンドンへ立ちましたが、私だけは久しぶりの息子と一日でも多く暮したい気もあり、一つはまたクリスマスに近づいても、まだ花園に薔薇や堇を見るやうな南欧の暖かい空のいろに引かれてひとり残つてをります。それにつけても、思ひ出されますのは、お約束申上げた通信のあまりにも長い怠りでございます。船中からは絵ハガキで申上げましたやうに、これは書く事がなかつた為ではなく、あまりに多過ぎた見聞が、丁度胸いっぱいおもの念ひで口を塞がれたに似てをりました。しかし、今は夢中で泳いでゐた水の上を、岸からふり返つて見るだけのわづかな余裕を得たやうに思はれますので、少しづつでも書き留めて見たいと存じます。

さてそれにしても何からどう書いたものでせう。をかしな云ひ方ですが、私の洋行は日本を後にした時からではなく、出立前既にはじまつてゐたやうなものですから。この意味がおわかりになるでせうか。さうです。この滑稽な一幕から先づお話しいたしませう。

外出が何よりおつくうで、訪問でも買ひものでも思ひたつて一週間はぐづぐづしてゐる私が、外国